SEEDS Asia Newsletter Vol.53 (July, Aug. 2016)

インド・バラナシ市に於ける気候変更と防災教育ワークショップにて
バラナシ子ども気候新聞「プラハリ」の初刊の発行記念集合写真

Group photo on the ocasion of the first publication of the DRR newspaper by Varanasi children "Prahari"
at the Workshop on Climate Change and Disaster Risk Reduction Education in Varanasi, India

Newsletter

【ソフトバンク株式会社のアプリ「かざして募金」でこの SEEDS のロゴをかざすと簡単に寄付ができます。】

Table of Contents Vol.53 (July, Aug. 2016)

・熊本：熊本地震被災者支援
・丹波市：丹波市町づくり共同事業
・東北：東日本大震災被災者支援事業
・バングラデシュ：バングラデシュ都市部におけるコミュニティ防災力向上事業
・インド：参加型コミュニティ防災推進事業
・ミャンマー：USAID の能力強化支援プロジェクト
・フィリピン：セブ州における防災教育の技術移転事業
・本部からのお知らせ

・Project on Support for people affected by Kumamoto Earthquake
・Joint Project with Tamba City on Community Development
・Project on Support for people affected by Great East Japan Earthquake & Tsunami
・Bangladesh: Project on Capacity Building for Community-Based DRR in Urban Areas of Bangladesh
・India: Project on Participartory Community-Based DRM
・Myanmar: Project on Myanmar Consortium for Capacity Development on Disaster Management
・Philippines: Project on DRR Education with School- Community Linkage in Cebu
・Announcements from SEEDS Asia

（特定非営利活動法人 SEEDS Asia）
〒658-0072
3-11-30-302 Okamoto,
Higashi Nada ku, Kobe, Japan
神戸市東灘区岡本3-11-30-302
Tel: 078-766-9412
Fax: 078-766-9413
Email: rep@seedsasia.org
Web: www.seedsasia.org
Facebook:http://www.facebook.com/pages/SEEDS-Asia/206338119398923

熊本地震被災者支援

【ジャパン・プラットフォーム】

宇城市では､6 か所あった避難所が 8 月 15 日に 1 か所に統合となりました。一方、仮設住宅は 143 戸の建設が完了しています。6 月下旬から 7 月中旬まで続いた大雨の影響もあり、実際に仮設住宅へ入居するまでには時間がかかったケースもありましたが、少しずつ、被災者の方々の新たな生活がスタートしています。

避難所での支援活動

SEEDS Asia が運営支援を行う宇城市生活復興支援ボランティアセンターは、6 月 15 日、避難所でのヒアリング調査をもとに、傾聴講座を受講した方たちを対象とした説明会を実施しました。避難所の状況を聞いた参加者は、勉強したスキルを活かして被災者の力になりたいと、その場で傾聴ボランティア活動を行うことが決定しました。2 週間に 1 度のペースで 6 か所ある避難所を廻りながら被災者の声に耳を傾け、気持ちに寄り添う活動をしています。活動後や月 1 回の全体会議で振り返りの機会を設け、よりよい活動をめざしています。避難所閉鎖後は、ニーズに応じて、引き続き仮設住宅等での傾聴活動を行う予定です。

避難所でのボランティアによる傾聴活動

仮設住宅への支援活動

7 月からは、仮設住宅での支援も始まりました。まずは、1 件 1 件、戸別に訪問し、生活面や健康面の状況確認やニーズの把握を行っています。仮設住宅への支援に関しては、支援者機関の連携が重要であるため、宇城市生活復興支援ボランティアセンターの呼びかけで、宇城市役所、保健センター、地域包括支援センターによる「生活復興支援連携会議」を定期的に開催し、情報の共有化を図っています。

仮設住宅での戸別訪問

また、東日本大震災の経験を活かした支援を行うため、ボランティアステーション in 気仙沼から講師を招聘し、気仙沼での支援活動の事例を紹介する機会を設けました。気仙沼からは、その後も応援メッセージを掲載したミニコミ誌を宇城市内に配布したり、傾聴ボランティアに義援金を送ったりと、継続的な支援をいただいています。

【ご寄付のお願い】
SEEDS Asia は、以下の CANPAN 決済サイトにて「熊本地震被災者支援専用寄付」を受け付けています。被災地では、長期的な支援を必要としています。皆様方の温かいご支援をどうぞ宜しくお願い致します。

https://kessai.canpan.info/org/seedsasia/donation/101408/

丹波市：丹波市まちづくり協働事業

【丹波市まちづくり協働事業/CWS Japan (UMCOR)】

丹波市立市島中学校での防災講演会

2016 年 7 月 11 日、丹波市立市島中学校での防災講演会で、SEEDS Asia が講師となり、全生徒に向けて、東日本大震災や熊本地震の防災上の教訓について伝えました。

市島中学校は、2014 年の豪雨災害を校区に抱える中学校で、皆さん最後まで真剣に聞いてくださり、「なぜ防災について学ぶ必要があるのか」という大事なメッセージが伝えられたと思います。

防災指定校連絡会議（第 3 回）の開催

2016 年 7 月 22 日、丹波市教育委員会、防災指定校の 4 校の代表者と SEEDS Asia が集まり、第 3 回防災指定校連絡会議を開催しました。

第 3 回目の会議では、特に、学校と地域との連携体制づくりに関する議論が白熱しました。学校が地域へのアプローチを円滑に行うためには、地域防災を推進する防災関係課との情報共有が必要、という結論になり、次回以降、防災関係課にこの会議への参加を打診することとなりました。

丹波市立前山小学校での防災ウォークと教員研修会

2016 年 8 月 22 日、丹波市立前山小学校で、保護者参加の清掃活動の終了後、各登校班に分かれ、児童、保護者、教師が下校中に防災上の安全な個所、危険な個所を点検する、防災ウォークを実施しました。前山小学校の児童や保護者の多くは､2014 年の豪雨災害で被災しました。防災ウォークでは、保護者から、浸水した道路を安全に避難するため、みなで手をつなぎながら通行した、といった、実際の体験談を聞くことができました。

また、この防災ウォークの結果を今後の授業につなげるため、翌 8 月 23 日には、SEEDS Asia が講師となり、防災マップづくりに関する教員研修会を実施しました。研修により、先生方も、児童に何を教えていくべきか、具体的になったようです。

防災ウォークで土砂崩壊現場を確認

神戸・京都視察研修

2016 年 8 月 26 日、丹波市教育委員会、防災指定校 4 校の教員とその地域の方々、計 18 名を神戸、京都にお招きし、学校と地域との連携による防災教育の実践事例を学ぶための研修を実施しました。この研修は、南三陸・気仙沼からの関西視察研修と合同で実施し、それぞれの気づきを共有する機会となりました。

TAMBA 地域づくり大学での講演

2016 年 8 月 27 日、TAMBA 地域づくり大学のオープンキャンパスの第 1 回目の講義で、SEEDS Asia が講師となり、「地域づくりと防災教育」に関する講演を行いました。当日は、丹波市で地震が発生した場合について想定するワークショップも実施しました。参加者の中には、2014 年の豪雨災害を経験された方もおり、当時の様子を思い浮かべながら、発災時の課題について真剣に議論に参加してくださりました。

ワークショップでの真剣な議論

丹波市復興イベント和っしょいでの出展

2016 年 8 月 27 日、丹波市市島地域で開催された復興イベントー心つなぐ 2 days「和一処（わっしょい）」に出展しました。ブースでは、国内外の SEEDS Asia の活動を写真で紹介するとともに、熊本地震の被災者へのメッセージを募集し、そのメッセージ入りのフォトブックを作成しました。被災地から被災地への応援メッセージは、宇城市の仮設住宅でお茶会を実施する際に、参加者にご覧いただく予定です。

東北：東日本大震災被災者支援事業

【UMCOR・CWS Japan 支援事業】

南三陸町・気仙沼市の関西視察研修

8 月 24 日から 27 日まで、南三陸町入谷地区防災教育推進委員会の教員、自治区長と気仙沼市中央地区自治会連絡協議会のメンバー計 10 名を対象に、丹波市、神戸市、そして京都市へ「地域と連携した防災教育」の推進のための研修を実施しました。

台風の影響で 22 日まで日本は大荒れであり、無事に出発ができるか心配でしたが、何とか出発。東北から 8 時間かけて朝から移動し、滞在地の京都府福知山市に到着したのは夕方でした。東北より気温が高い関西への夏の移動でしたが、「思ったより暑くないね。」と一同一安心。

25 日、丹波市氷上中学校での教員研修会で、震災当時、南三陸町立戸倉小学校の教諭だった斎藤先生が、震災時の避難から学校教育の再開、そして現在の学校の様子までの経験談を話した。「避難生活で役立ったのは【ふるさと学習】で培った地域との関係だった。」という言葉に、現在、丹波市で取り組んでいる「地域と連携した防災教育」の在り方を考えるきっかけになったと思われます。参加された氷上中学校や市島中学校の教員 60 名は、同じ教員の立場で語られた被災経験をじっと聞き入っていました。その後、2014 年の丹波市豪雨災害の説明を被災地域の自治会長である余田会長にお聞きしたり、丹波市復興推進室の案内で被災地の傷跡と復興の状況を見て回ったりました。中山間地という、入谷地区と似た地勢である丹波市の土砂崩れの跡は、当時の豪雨災害と同規模の雨量が入谷地区で降れば、同様に土砂崩れが起こり得ることを実感として感じさせるに十分な説得力を持っていました。

氷上中学校にて 60 名を前に講演する斎藤教諭

翌 26 日は神戸市に移動し、神戸市消防から防災福祉コミュニティの説明を聞きました。阪神・淡路大震災後に神戸市が推進したコミュニティ防災施策の経験を伺うことで、今後の自主防災組織のより良い運営のヒントを学びました。

さらに午後には京都市に移動し、京都市立高倉小学校にて、すまいる 21 プラン委員会（同小学校の学校運営協議会）の防災部会の取組を伺い、さらに、同部会の案内で、実際に防災まちあるきを実施していただきました。京都市中心部において、地域の連携による防災教育がどのように行われているのか、ユーモア溢れる説明で危険個所や防災施設を見て回り、猛暑も忘れる充実した時間を過ごすことができました。

今回、南三陸町や気仙沼から参加された教員や自治会長の方々は、研修を通して、お互いの人間関係を深め、学校と地域がお互いに協力して防災のために取り組んでいくことを約束しました。

京都での防災まちあるき

また、インフラ面においては、電気や水といったライフラインはほとんどのエリアに普及しているものの、多くの区長が、車両が入れないほど狭い未整備の道路や、劣悪な状況の排水溝を最重要課題と考えていることが分かりました。こうした状況下で災害が起きたらどうなるか、何をしなければならないか、そして住民レベルで何ができるかを、フィールド調査を通して話し合いました。

ゴミであふれた排水溝

バングラデシュ

【JICA 草の根事業協力：バングラデシュ都市部におけるコミュニティ防災力向上事業】

災害リスクアセスメントフィールドサーベイ調査終了

2016 年 6 月より BRAC 大学の協力のもと実施してきた、Urban Disaster Risk Index(UDRI) による災害リスクのフィールド調査が 8 月末で終了しました。都市部の災害レジリエンス（災害からの被害を最小限にし、早期に回復しようとする力）を図る 5 つの指標 (インフラ、社会、経済、制度、自然環境) に沿った計 125 項目の質問票を基に、本事業対象地域である北ダッカ市内 36 区の区長を訪問し、インタビューおよびディスカッションを通してデータ収集を行いました。このデータをもとに、9 月より分析を開始します。

UDRI フィールドサーベイの様子

北ダッカ市では、1988 年と 1998 年の大洪水以来大きな災害は経験していないものの、ほとんどの区において雨季の浸水は日常茶飯事です。また、火事や建物の倒壊、落雷に加え、ネパールやミャンマー地震発生時にダッカでも揺れを経験したことから、地震への関心も高まっています。

ムンバイ市 ALM (Advance Locality Management) 訪問

7 月 29 日と 30 日に、ムンバイ市 (インド) の ALM を訪問しました。住民によるボランタリーグループである ALM は、市と住民がパートナーシップを組み、ゴミ問題をはじめ周辺地域の環境問題に協力して取り組んでいます。住民が行政と協力し自発的に防災に取り組むシステム作りを目指すバングラデシュ事業は、この ALM をモデルにしています。

住宅エリアごとにつくられる ALM は、主にゴミの分別やコンポストの設置、道路の美化・緑化活動を行っています。さらに、多くの ALM が、さまざまな住民同士の交流イベントを企画するなど、幅広い地域活動を行っています。各 ALM は設立時にムンバイ市に登録され、市が承認した住民グループであることから、市に市民の声が届きやすくなり、市のサポートのもと、よりスムーズな問題解決ができる仕組みになっています。今回訪問した ALM はいずれも 15 年以上その活動を続けており、自分たちの取り組みに大変誇りを持ち、ALM を大切にされているのが非常に印象的でした。

ALM によって整備されている通り。
ムンバイではないようだと訪問者を驚かせています。

インド

【日本 NGO 連携無償資金協力事業：バラナシ市における参加型コミュニティ防災推進事業】

SEEDS Asia はインドのバラナシ市において「クライメート・スクール(CS)」と呼ばれる、気象や大気汚染の観測装置を設置し、気候変動教育 / 防災教育を地域住民と行うプロジェクトを実施中です。7 月、8 月には下記の活動を行いました。

学校及び地域防災協議会向け豪雨対策を含めたタウンウォッチング・ワークショップの開催

7 月 20 日から 31 日にかけて ,5 校の CS 及び各 CS と連携して防災活動を行っていく地域防災協議会メンバーを対象に、各地で豪雨・洪水を想定したタウンウォッチング・プログラムを実施しました。同プログラムは、地域の災害リスクを認識するためのもので、まず学校や近所での過去の災害を知ること、豪雨による洪水時の避難場所を認識すること、災害リスクの削減のためにできることを考えることを目的に実施しました。参加した CS の先生たちは、「今までの認識を改める機会になった」、「自分たちにできる対策が沢山あることに気が付いた」という感想を多く頂きました。このタウンウォッチングで認識された改善点に向けて、8 月 3 日に各学校や地域で計画策定が行われました。

セントラルヒンドゥ男子校でのタウンウォッチングの様子

学校と地域の連携による気候変動と防災教育ワークショップ

8 月 2 日から 3 日、京都から専門家をバラナシに招聘し、「学校と地域の連携による気候変動と防災教育ワークショップ」を開催しました。同防災研修には、5 校の CS の教師 10 名と学生 13 名、その 5 地域の住民 10 名が参加しました。バラナシ県行政を代表して、プルキット・カレー (IAS) バラナシ県 開発局長、日本国大使館からは西村泰子 第一等書記官よりご挨拶を賜り、カウンターパートとであるバラナシ・ヒンドゥー大学 持続可能な開発研究所 (BHU-IESD) のラグバンシ教授と SEEDS Asia 事務局長の中川裕子より、研修の目的と参加者への謝辞を述べました。

本研修では、京都市立高倉小学校岸田蘭子校長と、防災寺子屋・京都の代表を務める太田興先生から、約 150 年続く学校と地域の連携による防災対策について学ぶ機会となりました。特に、高倉小学校では、地域と防災に取り組む様子やその組織体制、理科や算数の授業を通して防災に関する知識を学べるように取り組んでいる防災教育のカリキュラムに参加者の関心が集まりました。また、2 日目には、怪我人を運ぶ方法、毛布と竿など身近なものを使った担架の作成、用途に応じた 3 種類のロープの結び方などを太田先生と共に実習し、活気のある学びの時間となりました。

CS の学生が積極的に意見を発表したこともあり、プルキット・カレーバラナシ県開発局長により、激励と共に、今後も定期的な情報共有をしたり、学生が市内の防災事業や行政の防災の役割について学び、記事にしたりしてはどうか、といった提案のお言葉をいただきました。本研修を通じて、京都市の活動がバラナシで紹介され、学校や地域における防災活動を促進する機会となるよう、現地でもフォローしていきます。

また、同活動は NKK World ラジオでの特集番組として紹介されました。

☆ From PC パソコンの場合 (1 カ月視聴可能)
http://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/radio/clip/…

☆ From Smart Phone モバイルの場合 (1 週間視聴可能)
アプリのダウンロードの上、14 日のプログラム "Spreading Disaster Prevention Knowledge from School" を選択し視聴できます。
https://www.nhk.or.jp/nhkworld/en/app/

プルキット・カレーバラナシ県開発局長からのご挨拶

京都市立高倉小学校の岸田蘭子先生による講演の様子

防災寺子屋・京都の太田興代表による講演・実演の様子

バラナシ子ども気候新聞　『プラハリ』初号が発刊

8 月 2 日、CS に選定された 5 校の学生の記事を集めた、バラナシ子ども新聞『プラハリ』の初号が発刊され、インドで始まりを意味する「灯火式」を行いました。「プラハリ」とはヒンディー語で「見張り番」という意味で、子どもたちが新聞作成を通して学生がお互いに防災について学び合い、一般市民に気候変動や防災について啓発するツールとなっています。

初刊となった今回は、6 年生から 9 年生がレポーターとなり、バラナシ市やインドで起きた災害について、特に備えによる被災リスクの削減、環境と防災の関係性に焦点に当て、詩やイラストを記載しました。掲載記事は、子どもたちから投稿された数多くの記事から、SEEDS Asia や BHU、メディア関係者で構成される同新聞の編集委員会メンバーによって選定され、絵や記事を織り込みながらまとめられました。4 ページにわたる紙面には、校長先生からのメッセージや支援者による広告も掲載されています。英語版とヒンディー語版の合計 1,000 部が学校、教育機関、地域社会やメディアに配布されました。

灯火式の様子

子ども集合写真

ミャンマー

【USAID　国家防災マネジメントトレーニングセンターに向けた能力強化 共同プロジェクト】

社会福祉救済復興省・復興救済局をカウンターパートとして、ミャンマー国家防災マネジメントトレーニングセンターにおける防災マネジメントトレーニング及び防災に関わる研究や啓発のプロジェクトを実施しています。7 月から 8 月の活動は下記のとおりです。

(* 共同コンソーシアムメンバー：UNHABITAT/UNDP/Myanmar Red Cross & American Red Cross/ACTED 他 .
技術協力団体：UNICEF, HelpAge, Handicap International, ASHOKA 他)

CCRI（湾岸地域コミュニティの災害回復力調査）最終報告書提出

1 月 5 日から 4 か月に亘り、エヤワディ地域の全区にて実施していた CCRI（湾岸地域コミュニティの災害回復力調査）の最終報告書が 7 月下旬に、奨学生であるヤンゴン工科大学博士課程学生のエーエーカインさんから提出されました。 報告書に基づいた活動内容を議論するため、ステークホルダーを対象としたワークショップを 8 月 2 0 日より開始する準備をしていたもののミャンマー国内での大洪水が発生し、関係省庁と相談の結果、10 月中に実施できるよう調整中です。

CDRI (気候変動に起因した災害を対象とする対応力評価イニシアティブ) に関する最終報告書提出

ダゴン大学との連携によって、CDRI (気候変動に起因した災害を対象とする対応力評価イニシアティブ) に関する調査をエヤワディ地域の域都であるパテイン市で 6 月に実施され、 1 市 5 区の調査結果が含まれた中間報告書が既に提出され、8 月末には最終報告書が提出されました。調査に関わる協定に基づき、CCRI 調査に関わる奨学金の残金 2,500 ドル（合計 5,000 ドル）が同大学地理学部学部長 キンキンワイ教授を中心とする調査チームに手渡されました。調査の結果は 10 月以降、計画策定ワークショップを開催し公表して今後の開発や防災の基礎資料として活用される予定となっています。

ダゴン大学へ奨学金を提供

防災における科学技術の役割促進に関わる啓発活動

科学技術を踏まえた、より科学的なデータに基づく防災を促進するため、本プロジェクトでは防災に関わる調査を行いながら若手研究者の能力向上を図っています。今年度末のプロジェクト終了を前に、教育省、社会福祉救済復興省、大学機関、コンソーシアムメンバーの間で防災における科学技術の重要性について共通した認識と、今後の持続的な計画を策定するための協議会を１０月上旬に予定しています。

上記のイベントにあたり、 8 月 23 日、社会福祉救済復興省・復興救済局のコーコーナイン局長、そして教育省・オルタナティブ教育局 (元ミャンマー教育調査局) のカイン・ミェ局長に説明し、防災に関する調査を実施する上での大学や調査機関の役割の重要性に強く賛同していただくことができました。次号で協議会の様子をお伝えいたします。

社会福祉救済復興省・復興救済局との会議

文部科学省への表敬訪問

教育省・オルタナティブ教育局長との会議

丹波市の市長・教育長表敬訪問

フィリピン（セブ）

【JICA 草の根技術協力事業：セブ州における地域との連携による防災教育の技術移転事業】

第 2 回本邦研修

昨年度に引き続き、2016 年 6 月 20 日～ 29 日の 10 日間、本邦研修を実施しました。この本邦研修は、事業終了後も防災教育推進の継続を図るという目的のもと、今後の防災教育の展開と持続性の担い手となる国及び地方レベルの代表者として教育省本省防災管理室室長及び第 7 地方事務所所長と、防災教育を融合したカリキュラム開発の中心となる防災教育推進校を管轄する地区事務所のカリキュラム開発部長 5 名の合計 7 名が参加しました。研修は、阪神・淡路大震災の被災地域のまちあるき、神戸市内の学校訪問による防災教育の事例視察、兵庫県立教育研修所で実施された兵庫県教育委員会による防災教育推進指導員養成講座の聴講、2014 年豪雨災害で被災した丹波市での市長・教育長への表敬訪問と同市の復興・防災に関する取組の視察、東京臨海広域防災公園の視察、文部科学省への表敬訪問、東北大学災害科学国際研究所による講義、東日本大震災の津波被災地の視察等、多岐に渡りました。東日本大震災の被災地訪問では、津波で多くの人々が犠牲となった仙台市荒浜地区の沿岸で涙を流す参加者の姿がありました。この研修を通じて、日本でしか得ることのできない経験が参加者一人ひとりの心に刻まれたことは何よりの収穫です。最終日に行われた振り返りワークショップでは、「地域との連携による防災教育の意義を見出し、自らがその意義を周囲に伝え、変化を起こしていく存在なのだと認識した」や、「草の根レベルでも防災教育推進のためのシステム構築に向けて行動を起こしていかなければならないと思う」といった、意欲的な発言が聞かれました。参加者一人ひとりが研修を通じて心に刻んだ経験が、地域との連携による防災教育の実現への大きな原動力となることを期待します。

各モデル校及び推進校における防災教育の取り組み

昨年 10 月に防災教育モデル校を対象とした教員研修、また今年 5 月には防災教育推進校を対象とした教員研修が終了し、防災教育への知識とノウハウを身につけた教員たち。今後はそれぞれの現場でそれをどのように活用し実施するかが、持続的かつ制度化された防災教育実現への鍵となります。フィリピンの「防災意識啓発強化月間」である 7 月には、各モデル校、推進校で防災教育イベントが行われました。炎天のもと、暑さを物ともせず、実に生き生きと防災教育イベントに参加する子どもたちの姿はエネルギーに満ち溢れていました。この防災教育イベントを通じ、各学校の防災教育への積極的な取り組みを実際に目にすることで、防災教育の種が教員から子どもたちへ、また子どもたちから地域へと着実に撒かれ始めているのを実感しました。今後、この種が教員や子どもたちを通じて、学校に、また地域にしっかりとした根を張り、大きく成長していくことを願っています。

防災に関連したロールプレイ

緊急時の非常食づくり

兵庫県教育委員会専門家のセブ訪問

8 月 21 日～ 26 日の 6 日間、兵庫県教育委員会の防災教育行政専門家及び EARTH（震災・学校支援チーム）員がセブを訪問しました。この訪問の目的は、兵庫県で蓄積された防災教育の知見や経験をフィリピンにつなぎ、今後の活動の発展に活かしていくことです。今回の訪問では 6 校の防災教育モデル校・推進校にて、合計 7 授業の視察を行いました。フィリピンでは通常授業に防災教育という科目は含まれていないため、教員は既存の科目に防災教育を融合することで、防災教育の持続可能性確保を目指しています。英語、算数、理科、音楽･美術等、どの学校のどの科目にも、様々な形で防災教育が巧みに融合され、自然な流れでそれぞれの授業が展開されており、専門家の方々からも称賛の声が上がりました。また、日本の学校では少し想像がつきにくいような、フィリピンの民族性や気質を活かした歌や踊り、ロールプレイ等を積極的に取り入れた授業と、それに生き生きと取り組む生徒の姿もとても印象的でした。日本とフィリピンの「違い」を知り、その「違い」を受け入れた先に生まれる新たな防災教育の視点。専門家の方からも「いい刺激を受けました」「今後、自分の学校での防災教育にロールプレイを取り入れようと思います」等の声が聞かれ、お互いの交流により、フィリピンだけでなく双方にとって非常に有意義な学びを得た訪問となりました。

兵庫県教育委員会の専門家による防災授業視察

本部からのお知らせ

新スタッフ紹介

インド事務所　（林　早苗）

皆さま、はじめまして。8 月からインドのバラナシ事業を担当することになりました林早苗と申します。12 年ぶりにインドに戻りました。前回は、ヒンドゥー社会に関する人類学的研究のためにムンバイに滞在しましたが、バラナシはムンバイとは違って宗教性が強く、また昔からの習慣が色濃く残っており、日々、新しい発見があり、大変興味深く思っています。

国際協力に関しては、上記の大学院での研究を終えた後、国連機関や国際機関、国際 NGO や開発コンサルタント会社に勤務し、開発事業に携わってきました。昨年から母校の大学にて、東南アジア文化論の講義を担当し、東南アジアで実際に見聞きしたものを含め、学生たちに人々の現状を伝えるよう努めています。

防災分野は、昨今の大きな災害の影響もあり、国際協力分野においても喫緊の課題であり、私自身もこれまでの業務において取り組むことがありました。今回、防災専門 NGO の SEEDS Asia の一員として本格的に携わるようになった今、仕事を通して防災について学びながら、現地の防災の取り組みに貢献できるよう努めていきます。

Kumamoto Earthquake

Japan Platform

In Uki City, six (6) evacuation shelters were unified into one (1) shelter on 15th August. Meanwhile, the construction of 143 temporary houses was completed. It took some residents some time to move into the temporary houses due to the effect of heavy rain from the end of June to the middle of July, however, the new life of earthquake-affected people has gradually started.

Support activities at evacuation shelters

Based on hearing investigation conducted at evacuation shelters, Uki City Recovery Support Volunteer Center whose operation is supported by SEEDS Asia conducted an explanatory meeting for the people who received training in listening skills. Learning about the condition at evacuation shelters, the participants decided to become volunteer listeners, using the skills that they learned to support earthquake-affected people. Volunteer listeners are having bimonthly visits to the six (6) evacuation shelters to listen to the voices of affected people and consider their feelings. Reflection chances are created after each time of visit or at monthly overall meeting to aim at better activities. After evacuation shelters are closed, based on the needs, the conduct of this listening activity is expected to continue in temporary housing.

Listening activity by volunteers at evacuation shelters

Support activities for temporary housing

From July, support activities have also started in temporary housing. Firstly, door-to-door visits are made to each house so that living and health conditions of affected people are confirmed and their needs for the improvement of their living conditions are grasped. Regarding support for temporary housing, the cooperation with aid organizations is important. Therefore, Uki City Recovery Support Volunteer Center appealed Uki City Office, Health Center, Community General Support Center to join and regularly hold a meeting on " Cooperation in the Support for Recovery" to share information with one another.

A door-to-door visit to a temporary house

In order to provide the support that leverages the experience of the Great East Japan Earthquake and Tsunami, lecturers from Volunteer Station in Kesennuma were invited to introduce examples of support activities in Kesennuma. After that, continuous support has been provided from Kesennuma, for example, through distributing a community paper that carried support/cheering messages from Kesennuma to Uki City, or sending donation money to a group of volunteer listeners.

Tamba City

Joint Project with Tanba City for Community Development, CWS Japan (UMCOR)

Lecture on disaster risk reduction (DRR) at Ichijima Junior High School in Tamba City

On 11th July 2016, in the lecture on DRR at Ichijima Junior High School (JHS) in Tamba City, SEEDS Asia served as a lecturer and conveyed lessons on disaster risk reduction learnt from the Great East Japan Earthquake and Tsunami and Kumamoto Earthquake to all the students of the school.

A part of the school district of Ichijima JHS was affected by the heavy rainfall disaster in 2014. Every student listened attentively until the end, the important message about the necessity of learning about DRR was conveyed.

The third liaison meeting of appointed DRR schools

On 22nd July 2016, Board of Education of Tamba City, representatives of four appointed DRR schools and SEEDS Asia gathered in the third liaison meeting of appointed DRR schools.

The special point of the third meeting was a heated discussion about cooperation system between schools and local communities. It was concluded that information-sharing with DRR Division, which promotes community-based DRR, was necessary for schools to approach the communities smoothly, and that DRR Division would be invited to the liaison meeting from the next time.

DRR walking and training for teachers at Sakiyama Elementary School (ES) in Tamba City

On 22nd August 2016, after the cleaning activity with participation of parents ended, the children, parents and teachers were divided into groups and had DRR walking activity to inspect safe and risky places while leaving school to go back home. Many students and their parents of Sakiyama ES suffered damage caused by the heavy rainfall of 2014. During DRR walking, SEEDS members heard from parents the story of a real experience when everyone held hands, going together in order to evacuate from inundated streets.

Moreover, in order to link the result of this DRR walking activity to future classes, on 23rd August, SEEDS Asia served as a lecturer and implemented training for teachers in the development of DRR map. Through the training, the teachers seemed to become specific about what to teach their students.

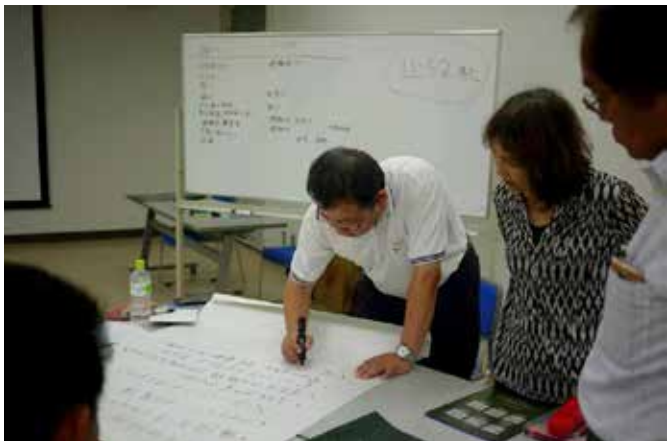
Checking a landslide site in DRR walking

Study visit to Kobe and Kyoto

On 26th August, a study visit was conducted for a total of 18 participants, including an official from Board of Education in Tamba City, teachers from four appointed DRR schools and people from respective community to Kobe and Kyoto City to learn good practices of DRR education through cooperation of schools and communities. This study visit was conducted in combination with Kansai study visit of people from Minami-Sanriku and Kesennuma, therefore, it became an opportunity for both missions to share their realization and learning.

DRR seminar in the series of public lectures on community development in Tamba City

On 27th August, SEEDS Asia delivered a lecture on "community development with DRR education" at the first seminar in the series of public lectures on community development in Tamba City. In the seminar, a workshop activity was included to discuss the situation where an earthquake occurs in the city. Among the participants, there were people who suffered from the damage caused by the heavy rainfall in 2014. Being reminded of that time, they participated seriously in the discussion about the issues that may arise when a disaster occurs.



Serious discussion at the workshop

Participation in "Wasshoi" - an event for the recovery of Tamba City

On 27th August 2016, SEEDS Asia cooperated with "Wasshoi" , a two-day event that was held in Ichijima region in Tamba City. In its booth, SEEDS Asia exhibited photos to introduce its activities in Japan and abroad, and also collected cheering messages that would be made into a photo book to send to affected people in Kumamoto Earthquake. The messages, therefore, were written by a disaster-affected area for another disaster-affected area. They will be shown to the earthquake-affected people who are living at temporary housing in Uki City, Kumamoto Prefecture in their tea gathering.

The Great East Japan Earthquake

UMCOR・CWS Japan

Study visit to Kansai for DRR in Minami-Sanriku Town and Kesennuma City

From 24th to 27th August, a study visit for the promotion of "disaster risk reduction (DRR) education in cooperation with local community" with visits to Tamba City, Kobe City and Kyoto City was conducted for 10 participants including teachers and community leaders from the Committee for the Promotion of Disaster Risk Reduction (DRR) Education in Minami-Sanriku Town- Iriya area and members of Chuo Union of Neighborhood Associations in Kesennuma City.

People in Japan were agitated because of the typhoon that lasted until the 22nd, which made us worried about the safety of the departure, but we made our departure anyway. After travelling for eight hours from the morning from Tohoku, the party arrived in Fukuchiyama City in Kyoto Prefecture in the afternoon. It was a journey in summer to Kansai- the area that normally has higher temperature than Tohoku; however, it was not as hot as we thought, so all of us felt relieved.

On 25th, in the training for teachers at Hikami Junior High School in Tamba City, Ms. Saitou, who worked as a senior teacher at Tokura Elementary School in Minami-Sanriku Town when the Great East Japan Earthquake and Tsunami of 2011 occurred, talked about the experiences from the evacuation due to the tsunami to the restarting of school, as well as current situation of the school. "What became useful during our stay in an evacuation shelter was the relation with local community that has been cultivated through 'community studies' " , these words may have become a chance to think about the 'DRR education in cooperation with local community' that Tamba City is working on currently. 60 teachers from Hikami Junior High School and Ichijima Junior High School listened to the experiences silently as they were from the same standpoint of teachers. After that, participants listened to an explanation about heavy-rain disaster in Tamba City in 2014 from Mr. Yoda, the head of the neighborhood association in an affected area. They were also guided by Tamba City' s Division of Recovery around an affected area to observe the scars of the disaster and recovery situation. As Tamba City has the same topography of low upland with Iriya area, the scars of landslide in Tamba City provided a fully persuasive feeling about how landslide would possibly occur if the same amount of heavy rain fell down in Iriya area.

Senior teacher- Ms. Saito gave a speech
in front of 60 teachers at Hikami Junior High School

On 26th- the next day, participants moved back to Kobe City to listen to the explanation about Bosai Fukushi Community (BOKOMI), which is the system of voluntary organizations for DRR in the city, by Firefighting Department of Kobe City. By hearing the experience of the policy on community-based DRR which has been promoted by Kobe City since the Kobe Earthquake of 1995, participants learned the hints for better operation of voluntary organizations for DRR in the future.

Moreover, in the afternoon, participants went to Kyoto City. At Takakura Elementary School, they listened to the DRR Division of "Smile 21 Plan" Committee, which also serves as the school's operation council, about their activities. In addition, the DRR Division also implemented a real town-watching experience for the participants.

By walking around and watching risky spots and DRR facilities with an explanation full of humor, the participants forgot about the intense heat as they spent fruitful time learning about how DRR education through cooperation with local community was being implemented in the central area of Kyoto City.

The teachers and heads of neighborhood councils who participated in this study visit made their promise to deepen their relation and the cooperation between schools and local communities to work on DRR together.

DRR town-watching in Kyoto City

Bangladesh

JICA Grassroots Technical Cooperation Project: Project on Capacity Building for Community-Based DRR in Urban Areas of Bangladesh

Disaster Risk Assessment (UDRI) field survey completed

Disaster risk assessment field survey, which was started in June 2016 and implemented in cooperation with BRAC University, was completed in August. UDRI (Urban Disaster Risk Index) questionnaire consists of 125 points in 5 dimensions (physical, social, economic, institutional, natural). Based on the questionnaire, the field survey was conducted through interviews and discussions with councilors of 36 wards in Dhaka North City. The analysis process that is based on collected data will start in September.

In the UDRI field survey, ward councilors shared their experiences with disasters and challenges in their respective ward. There have been no big disasters after the floods in 1988 and 1998, however, inundation in monsoon season is a frequent occurrence in most of the wards. Also, in addition to fire, building collapse, and lightning strike, earthquake has got more attention recently as Dhaka also experienced tremors when Nepal and Myanmar Earthquake happened.

UDRI field survey

The biggest challenge which most of the wards face is infrastructure. Although accessibility to lifelines such as electricity and water is good, roads' condition and drainage system are quite poor in a large part of the city. Through UDRI survey, the team discussed what would happen at a time of disaster in such conditions, what would need to be done, and most importantly, what they should do at ward level.

Open drainage full of garbage

Visits to Mumbai City ALMs (Advance Locality Management)

On 29th and 30th July, SEEDS Asia' s staff traveled to Mumbai City (India) to visit Advanced Locality Management groups (ALMs). ALMs are voluntary citizen-based groups that work on waste management and environmental issues in their locality in partnership with the Mumbai municipal corporation.

Each ALM is formed from motivated citizens who are involved in their own housing area and neighboring area which share the same street. Their basic activities are waste segregation, composting, and beautification of the streets. However, many ALMs do not only limit themselves with those activities, but also take one step forward to do more such as organizing various events for the community, etc.

Each ALM is registered at the municipal corporation and recognized as a citizen's group. This helps them connect to appropriate department in the city government, have their voice heard, and get problems solved smoothly. All the visited ALMs have been actively working for over fifteen years and the members are very proud of their ALMs.

ALM is a successful model case where citizens and city government work together; Bangladesh project aims to create a similar system for DRR in Dhaka city.

Beautifully maintained street by ALM surprised visitors

India

Project Funded by Ministry of Foreign Affairs of Japan (MOFA): Project for Participatory Community-Based Disaster Risk Reduction Approaches in Varanasi

SEEDS Asia has been implementing the project that community people participate in Disaster Risk Reduction (DRR)/climate change education through promoting 'Climate Schools (CS)' where Automatic weather station and air sampler are installed. The activities conducted in July and August are as follows.

Town-watching and safety tips for heavy rain workshop for CS and the 'Citizen Forum'

From 20th to 30th July, town-watching workshops were organized for 5 CSs and 5 Citizen Forums, which were developing disaster resilience within communities in collaboration with CSs. The workshops aimed to identify risks of disasters especially for the torrential downpours and floods. For this purpose, firstly, participants learned the history of disasters in their area; secondly, they identified places for evacuation in the occurrence of heavy rains and floods; thirdly, they discussed the actions to be done to reduce loss and damage.

The participating CS teachers said, 'it is a good opportunity to examine my understanding of our area with regard to disasters' , and 'I realized that we could do many things by ourselves' . Based on these observations, CSs and the Citizen Forums created an action plan on 3rd August.

Town-watching in the Central Hindu Boys School

Training Workshop on Climate Change and Disaster Risk Reduction Education: disaster risk reduction through collaboration between communities and schools

From 2nd to 3rd August, a workshop was organized with attendance of two experts on DRR from Kyoto, Ms. Ranko Kishida, the principal of Takakura Elementary School, and Mr. Kō Ota from Kyoto Bosai Terakoya. The participants included 10 teachers and 13 students from CSs and 10 community people from the Citizen Forum. The opening speeches were made by Mr. Pulkit Khare, Chief Development Officer of Varanasi District and Ms. Yasuko Nishimura, First Secretary of the Embassy of Japan in India. The purpose of the workshop was explained by Professor A. Raghubanshi from the Institute of Environment and Sustainable Development, Banaras Hindu University and Ms. Yuko Nakagawa, Executive Director of SEEDS Asia. They also expressed their gratitude to all participants.

Ms. R. Kishida and Mr. K. Ota made several presentations on the 150-year experience and lessons in DRR in Kyoto city. A special attention was paid to the fact that Takakura Elementary School included DRR into its curriculum so that students could obtain knowledge of DRR while studying subjects such as mathematics and science. On the second day, all participants enjoyed Mr. Ota' s exercises to practice how to carry an injured person, how to make a stretcher with a blanket and a bamboo pole and how to tie a rope in three different methods according to three different purposes.

Seeing active participation of CS students, Mr. Khare, Chief Development Officer, proposed holding regular information-sharing meetings and students' excursions to the Varanasi city' s DRR projects and suggested that students write an article on the role of government in DRR.

With knowledge of the DRR activities in Kyoto introduced through this workshop to Varanasi city, the project team will continue to promote DRR in schools and communities. This workshop was broadcasted by NHK World Radio Programme as a special report.

☆ From PC (accessible till 13th Oct, 2016)
http://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/radio/clip/…

☆ From Smart Phone (accessible till 18th September)
After downloading the application, please chose Japan Focus on 14th September "Spreading Disaster Prevention Knowledge from School".
https://www.nhk.or.jp/nhkworld/en/app/

Opening speech by Mr. Pulkit Khare, chief development officer of Varanasi

Lecture by Ms. Ranko Kishida, principal of Takakura Elementary School

Lecture and demonstration by Mr. Ko Ota, Kyoto Bosai Terakoya

Launch of the first issue of PRAHARI, a students' DRR newspaper

On 2nd August, PRAHARI, a newspaper by CS students, was issued for the first time. Its launching was celebrated with 'aarti' , a ceremony which symbolizes 'beginning' in India.

'Prahari' means to "Be Alert" in Hindi. Prahari has become a tool for students to teach DRR to one another and to build awareness of DRR and climate changes among citizens.

The reporters for this first issue were students from Grade 6 to 9. They wrote about disasters in Varanasi, focusing on the importance of preparedness and the relationship between environment and DRR. The articles were selected by the editorial committee which consisted of SEEDS Asia, BHU and media, and the newsletter was complied with poems and illustrations. This four-page newspaper covered messages from the school principals and contained several advertisements by supporters.

The articles were in English and Hindi. One thousand copies were printed and distributed to schools, academia, community and media.

'Aarti'

Group photo with CS Children

Myanmar

USAID MCCDDM Project: Myanmar Consortium for Capacity Development on Disaster Management

SEEDS Asia is working on disaster management (DM) trainings and research and public awareness of disaster risk reduction (DRR) at Myanmar National Disaster Management Training Centre (DMTC) under the project in cooperation with Relief and Resettlement Department (RRD) of Ministry of Social welfare, Relief and Resettlement (MSRR). The report on our activities of July and August 2016 is as follows.

(*Consortium of MCCDDM : UNHABITAT/UNDP/Myanmar Red Cross & American Red Cross/ACTED etc. Technical support agencies in the consortium: UNICEF, HelpAge, Handicap International, ASHOKA etc)

Submission of the final report on Coastal Community Resilience Index (CCRI) Survey

At the end of July, Ms. Ei Ei Khine, a Ph. D student of Yangon Technological University, also a scholarship recipient, submitted the final report on CCRI survey conducted in 4 months from 5th January. In order to discuss the findings of the survey, a workshop for stakeholders had been planned to be held from 20th August 2016, but due to a series of flooding, it was postponed to October in consultation with relevant government offices.

Submission of the final report on Climate Disaster Resilience Index (CDRI) Survey

In cooperation with Dagon University, Climate Disaster Resilience Index (CDRI) survey in Pathein city, the capital city of Ayeyarwady Region, was conducted in June. Its midterm report which included the findings of 1 city and 5 wards was already submitted, and later its final report was submitted by the end of August 2016. In accordance with the agreement on the CDRI research, half of the research scholarship, 2,500 USD out of 5,000 USD, has been granted to research team headed by Professor Khin Khin Wai, Head of Geography Department of the university. After October 2016, a workshop on action-planning will be held and the findings of the research will be publicized in order to be used as the basic reference for the field of development and DRR in the future.

Scholarship granted to Dagon University

Awareness activity regarding the promotion of the roles of science and technology in DRR

In order to promote DRR based on scientific data by means of science and technology, the project is working on building capacity of young researchers besides conducting DRR research. Before the end of the project in February 2017, a meeting to promote common recognition of the importance of science and technology in DRR and sustainable action planning is being arranged with Ministry of Education, RRD, academic institutions and consortium members. Prior to the event, on 23rd August 2016, SEEDS Asia explained about it to Dr. Ko Ko Naing, Director General of RRD, and DR. Khine Mye, Director General of Alternative Education (former Myanmar Education Research Bureau), and they strongly approved the importance of the roles of universities and research institutions. We will report about the event in the next newsletter.

Meeting with Department of Relief and Resettlement
- Ministry of Social Welfare, Relief and Resettlement

Meeting with Director General of
Alternative Education under Ministry of Education

Philippines (Cebu)

JICA Grassroots Technical Cooperation Project: Capacity Building for Disaster Risk Reduction (DRR) through Cooperation between Local Communities and Education Sector in Cebu Province

The second Japan Study Visit

In ten days from 20th to 29th June, 2016, the second Japan Study Visit was conducted, following last year. A total of seven officials joined the Visit: Director of DRRMS (Disaster Risk Reduction and Management Service) of Department of Education (DepEd) Central Office and Director of DepEd Region 7 as representatives at national and regional levels; and Chiefs of 5 Curriculum Implementation Divisions (CID) who are in charge of curriculum integration of DRR from each DepEd division office that supervises the DRR Education Promotion Schools, in order to ensure the sustainability of DRR Education after the coverage duration of this Project. The training content was of a wide variety: town watching and school visits in Kobe City of Hyogo Prefecture; participation in a training session of DRR Education Promoting Experts which was organized by Hyogo Prefectural Board of Education (Hyogo BoE) in Kato City; observation of heavy-rain-affected area in Tamba City; participation in a lecture by Tamba BoE and Recovery and Rehabilitation Department; courtesy call to the Tamba City Mayor and Director of the BoE; observation of Tokyo Rinkai Disaster Prevention Park and courtesy call to MEXT (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology) in Tokyo; participation in a lecture by International Research Institute of Disaster Science of Tohoku University and observation of the area which was affected by EJET (East Japan Earthquake and Tsunami).

A participant shed tears beside the seashore in a tsunami-affected area in Arahama, Sendai where many people lost their lives at the time of EJET. It is worth more than anything that the knowledge and experience that the participants could have only in Japan through this Study Visit were etched in their hearts. On the last day, positive remarks such as “We should make a change to disseminate the importance of DRR Education in cooperation with the local community to others” , “We should take action to establish a system of DRR Education at grassroots level” came from the participants during the reflection workshop. Hopefully the experiences which were acquired and etched in their hearts through this Study Visit will be a boost to the realization of DRR Education in cooperation with the local communities.

Courtesy call to MEXT
(Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology)

Courtesy call to Tamba City Mayor and Director of Tamba BoE

DRR education initiatives in Model and Promotion School

All teachers at both DRR Education Model Schools and Promotion Schools acquired knowledge and skills on DRR education through the training for teachers which was held in October 2015 and May 2016. The key to the realization of sustainable and systematic DRR Education greatly depends on how teachers apply and implement their learning to classes at their school level. July is the "Disaster Consciousness Month" in the Philippines and each DRR Education Model/Promotion Schools organized DRR Education events during the month. Children participated lively and energetically in the events despite the blazing hot weather. These events proved that the seeds of DRR education got sown steadily from teachers to children and also from children to the community. Certainly, these seeds will grow up well and put firm roots in the schools as well as the communities through the teachers and children.

DRR role-play

Emergency cooking

Visit of experts from Hyogo Prefectural Board of Education (BoE)

From 21st to 26th August, DRR Education experts from Hyogo BoE including an EARTH (Emergency and Rescue Team by School Staff in Hyogo) member visited Cebu. The purpose of this visit is to share the accumulated knowledge and experience of Hyogo Prefecture in order to enhance the DRR Education in the Philippines in the future. During this visit, the total number of visited schools was six and the number of observed classes was seven. DRR Education is not included as a subject in the basic education curriculum in the Philippines, therefore, teachers are trying to integrate DRR Education into regular subjects in order to ensure the sustainability of it. In fact, Japanese experts praised that the teachers were able to integrate DRR Education into all subjects such as Mathematics, Science, and MAPEH (Music, Arts, Physical Education and Health) skillfully and naturally. Teachers applied many activities which seem difficult to be done in Japanese schools such as dancing, singing and role playing in their classes and it was impressive that the students lively took part in such activities. The experts said, "It was a good stimulus" , and "I will apply the role playing activity in my school" , and these comments show the mutual interaction with the school teachers motivated the experts as well. This visit was very meaningful for the educators in both the Philippines and Japan to find a new point of view of DRR Education to recognize differences between them.

Class observation by Hyogo BoE experts

Announcements from SEEDS Asia

New staff member

India Office （Sanae Hayashi）

Hello, I am Sanae Hayashi, who has been working on the project in Varanasi, India since August 2016. I have come back to India after 12 years. Compared to Mumbai where I undertook an anthropological research, Varanasi seems to be more religious with strong cultural orientations and habits. I am so happy to be here where I can discover something new and interesting every day.

The field of development is another part of my interests. Since I completed my research in postgraduate studies, I have worked for an UN agency, international organizations, international NGOs and a consultancy company. I also have been teaching anthropology in Southeast Asia at a university and trying to share what I have seen there with my students.

It is disaster risk reduction (DRR) that has drawn considerable attention the most in development due to recent catastrophic disasters. In this connection, I have worked on DRR indirectly. Since I am now a member of SEEDS Asia, which is a professional NGO in DRR, I am eager to learn DRR as much as possible so that I consequently will be able to contribute to effective implementation of DRR projects as well as local activities in Varanasi.